

弱視教育の視点を取り入れた環境設定とビジョンスライドの授業実践

U23C204A 教育実践コース 賀田祐介

1 研究の目的

ビジョンスライドとは、弱視教育（特別支援教育）の視点をもとに、「しかけ」や「ゆさぶり」を取り入れて Microsoft PowerPoint（マイクロソフト パワーポイント）を使って筆者が自作した教材である。文部科学省答申（2021）『『令和の日本型学校教育』の構築を目指して』では、2020 年代を通じて実現すべき「令和の日本型学校教育」の姿として「個別最適な学び」と「協働的な学び」が掲げられ、ICT の活用に関する基本的な考え方も示された。これらの方針に基づき、学校教育におけるタブレット等のデジタルデバイスの活用が急速に進められた。あれから 3 年、タブレットが学校現場に普及して、タブレットを使用するということについては一般化しつつある。一方、その使い方や効果については、まだ十分に分析・検証されていない。ビジョンスライドは、それからの課題を解決する一つの選択肢になり得ると筆者は捉えた。研究の目的として、ビジョンスライドのしかけやゆさぶりによって、関心・意欲・態度が上がる。思考やコミュニケーションが活性化する。学力が向上する。また、五感を生かした要素をスライドに含めることで、さらにその効果が上がると考えた。

〔キーワード〕 視覚支援、弱視教育、ICT、触察¹・体験、五感

2 ビジョンスライドの研究手法

1) 特別支援学校 盲部門実習

一年間、特別支援学校盲部門の実習（週 1 回）を継続して、児童生徒の学びの様子を観察した。視覚障害教育・弱視教育について D 教諭の指導助言を受けながら研究を進めた。

2) 先行研究・文献

弱視教育の実践や研究について、論文や文献から自実践に関わる内容を参考とした。

3) A 小学校授業実践

3 年 F 教諭、6 年 G 教諭、特別支援学級 H 教諭らの協力のもと、通常学級・特別支援学級の授業観察、授業実践、教材提供を行った。視覚を生かすために五感を使った授業づくりを考えた。

4) ビジョンスライド「10 のポイント」(図 1) 検証

ビジョンスライドとは、1 つの授業ですべてを詰め込むものではない。料理でスパイスを使うようにその組み合わせ方や効果について検証した。

ビジョンスライド 作成のポイント	
しかけ	ゆさぶり
①エラーをつくる(わざとまちがえる)	⑥仮説「もしも・・・だったら」
②順序を入れ替える	⑦断定「～にちがいない」から疑う
③選択肢をつくる	⑧あっ!と驚く新事実
④かくす・加える	⑨2段階の問い
⑤図解する	⑩関係のない導入とつなぐ

図 1 ビジョンスライド 作成のポイント

3 結果と考察

1) 特別支援学校 盲部門の実習

自身が全盲である E 教諭から触察について講話を受けた。E 教諭は「私たち全盲の人は、視覚以外の感覚で物事を理解している。他の感覚を総動員している。」と話されていた。本物に触れることで、体温、匂い、大きさ、触り心地を感じる。五感を使って見ていることが大切だと分かった。

2) 先行研究、文献から「触察」と「体験」の重要性

青柳、鳥山（2020）から、弱視児や盲児にとって、触察・体験が主体的な態度へつながることが

¹ 視覚障害教育において、触覚による観察を「触察」と表現する。

分かった。筆者はビジョンスライドの中に、これらの要素を取り込むことに大きな可能性が秘められていると捉えた。

3) A 小学校 触察を生かしたビジョンスライドの実践

第3学年国語科「すがたをかえる大豆」において、ビジョンスライドと触察（大豆のさやを使う）を融合した授業を行った。すると、匂い（嗅覚）、触る（触覚）、聞く（聴覚）、色の判別（視覚）、具体的なさやの様子に言及するノートが見られた。児童の振り返りノート30人分を分析したところ、硬さに関する記述8人、ふわふわ6人、さらさら1人、パキパキ1人、さやの表面を触って感じた様子2人、くさい1人、色に関する記述2人、音がした1人、もふもふ1人、ふさふさ1人、土のにおい1人、においに関する記述1人、小麦と比べる1人、枝豆との違い10人（重複あり）等と30人全員が五感に関する記載をしていた。

4) ビジョンスライド「10のポイント」実践

エラーをつくる（わざとまちがう）、順序を入れ替える、選択肢をつくる、かくす・加えるは、授業導入時に扱いやすく、子どもの関心・意欲・態度を高める特効薬のような効果があることが分かった。一方、筆者の実践とF教諭のビジョンスライドの実践から、10のしかけを同じように使い続けることによって、子どもに飽きが生じることが分かった。10のポイントは、授業のねらいに合わせて選択することが、授業内容の精選とビジョンスライドを生かす術になることが分かった。

4 総合考察

ビジョンスライドを使って授業をした8名の教員（A小学校、B小学校、特別支援学校聾部門）のインタビュー調査から、「子どもの関心・意欲・態度が上がった（すごく上がった100%）」「子どもの思考とコミュニケーションが活性化した（すごく効果があった87.5%）」「子ども授業の振り返りや単元テストから学力が上がった（すごく上がった37.5%）（まあまあ上がった62.5%）」「先生の負担が軽減した（すごく軽減した85.7%）」となり、いずれも肯定的評価は100%の結果を得た。学校現場におけるビジョンスライドの意義や可能性は大きい。また、小林・澤田（2023）は「ICTや情報機器の活用は、視覚障害による困難さを補うだけではなく、『主体的、対話的で深い学び』を実現するうえでも重要な役割を担っている」と述べている。これらをふまえ、筆者は弱視教育、視覚障害教育の要素が多様な子どもの学びに生かす可能性を秘めていると考えている。

5 今後の取組

ビジョンスライドと通常のスライドの2種類を用いた授業実践から関心・意欲・態度、学力の変化を明らかにして、ビジョンスライドの効果を検証することを目的とする。また、ビジョンスライドには、弱視教育で重要となる「教室環境の明るさ眩しさを調整する」「ズームによって見やすい支援を行う」「コントラストを意識したスライドを提示する」といった3つの要素と、視覚障害教育の「触察」「体験」を通した2つの要素を組み込む。

引用文献

中央教育審議会（2021）「令和の日本型学校教育」の構築を目指して

～全ての子どもたちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～（答申）

青柳まゆみ 鳥山由子（2020）『新・視覚障害教育入門』ジエース教育新社 p27 p43

小林秀之・澤田真弓（2023）『視覚障害教育の基本と実践』慶應義塾大学出版会 p114

光村図書（2023）国語科 第3学年「すがたをかえる大豆」